



Characteristics of awareness and behavior of medical staff for prevention of falling accidents among inpatients

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2019-12-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, 美佐子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000276

論文内容要旨

しめい 氏名	きのした みさこ 木下 美佐子
学位論文題名	Characteristics of awareness and behavior of medical staff for prevention of falling accidents among inpatients
<p>研究背景：入院患者の転倒転落は重症傷害や死亡事故にもつながることから、転倒転落事故防止は重要な課題となっている。転倒転落事故発生の要因は、日本医療機能評価機構の医療事故情報によると、患者の要因に加え、介助する側が考慮すべき認識や行動が多く上げられていた。私たちは、患者を見守る側の医療従事者の転倒転落事故防止策強化をはかる必要があると考えた。本研究の目的は、看護師用に作成した「転倒転落事故防止のための認識と行動の自己評価（SEABFAP）」の有効性を確認し、転倒転落事故防止に関連した各医療従事者の認識と行動の特徴を明らかにすることである。</p> <p>研究方法：2016年10月～11月に、特定機能病院（日本）の看護師、医師、検査技師、看護助手、放射線技師、薬剤師、理学療法士、栄養士、作業療法士、その他の医療従事者など1,670名にSEABFAPを配布し、5段階及び設問該当なしで回答する自記式質問調査を行った。設問内容の信頼性を確認するために、因子分析を行い抽出された因子に対し、クロンバックα係数を求めた。これとは別に職種別の回答の特徴をとらえるために、主成分分析、クラスター分析を行った。また、職種別特徴をより明らかにするために、該当無しの結果のみを取り出し、χ^2(カイ二乗)分析、残差分析を行った。</p> <p>結果：923名(55.3%)の有効回答を得た。質問項目の因子である下位尺度は7つで、クロンバックα係数は全て0.9以上であった。主成分分析から導き出した2つの主成分（認識と行動）を軸にクラスター分析した結果、特徴は4つに分類された。各群に多く分布した職種は、1群「認識と行動が共に低い」が栄養士・看護助手・検査技師、2群「認識と行動が程々ある」が医師・理学療法士・作業療法士、3群「認識はあるが行動が低い」が薬剤師・栄養士・検査技師・放射線技師・その他の職種群、4群「中程度の認識と高い行動」が看護師であった。設問項目と職種の設問該当無しのχ^2検定と残差分析の結果からは、看護師は設問該当無しの回答が少なく、次に医師・理学療法士・作業療法士が少なかった。それに対し、看護助手・検査技師は、ほとんどの項目で設問該当無しの回答が有意に多かった。</p> <p>結論：調査で用いたSEABFAPは、コミュニケーション、チームワーク、状況認識などを認識面、行動面の両面から調査するものであった。看護師は転倒・転落予防のために高い意識と行動を示し、医師、理学療法士、作業療法士は患者と直接触れあう機会が多く他職種に比べ行動面のスキルが高かった。看護助手の認識と行動は共に低く、転倒転落防止へ向けた働きかけの必要性を示唆するものであった。SEABFAPを多職種に適応して評価することで、各医療従事者の転倒転落予防における認識と行動の特徴を明らかにすることができた。</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

学位論文審査結果報告書

令和1年7月3日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏 名 木下 美佐子

学位論文題名

Characteristics of awareness and behavior of medical staff for prevention of falling accidents among inpatients

(入院患者の転倒転落事故防止に向けた医療従事者の認識と行動の特徴)

転倒転落事故発生の要因には、患者側の要因に加え、介助する側が考慮すべき認識や行動が多く挙げられる。本研究は、転倒転落事故防止に関連した医療従事者の職種別の認識と行動の特徴を明らかにする目的で行われた。

特定機能病院の1670名の医療スタッフに対し「事故防止のための意識と行動の自己評価」に回答する自記式質問調査を行った。まず設問内容の信頼性を確認するための因子分析を行い、次に職種別の回答の特徴を分析した。また「該当なし」を選択した数を抽出し職種別特徴の検討をさらに加えた。

結果は、923人の有効回答から質問項目の因子が7つ抽出され、Cronbachの α 係数は0.9以上であった。また「認識」と「行動」の2つの主成分が抽出され、さらに4つのクラスターに分類された。「認識と行動が共に低い」に栄養士・看護助手・検査技師が、「認識と行動が程々ある」に医師・理学療法士・作業療法士が、「認識はあるが行動が低い」に薬剤師・栄養士・検査技師・放射線技師が、「中程度の認識と高い行動」に看護師が多く分布した。「該当なし」の分析では、この選択は看護師で少なく、次に医師・理学療法士・作業療法士で少なかった。選択が多いのは看護助手と検査技師であった。

考察で、各職種間の転倒転落予防における認識と行動の特徴を明らかに出来たと述べられ、多職種横断的なチームワークやコミュニケーション、医療従事者への転倒防止の教育が重要であるとした。これは院内における転倒予防の方向性を示すものであり有用な情報である。

以上の内容を読者が納得できるように丁寧に記述しており、学位審査会での質疑応答でも適切に受け答えがなされ、提出された論文が学位論文として十分に値するものと判断した。

しかし本研究は、ある1つの特定機能病院のみで行われたという点で、普遍的な結果として十分なものとは言えない。この研究をさらに広い対象に広げ、院内転倒防止の対策法をより明らかにして頂きたい。

論文審査委員 主査 大井直往
副査 矢吹省司
副査 坪井 聡